
・・・調子に乗って暴走したから見ないで！の続き。のまた続き。

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・・・調子に乗って暴走したから見ないで！の続き。のまた続き。

【Nコード】

N4058P

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

ロリヤンデレっ娘や変態少女etc……、とほのぼのとラブコメやっけていきます。

気が向くと長編、普段は短編やってます。

批評などなど、いつでもお待ちしております。m(´`´´´)m
調子に乗るとダメになるので、叩いて下さい。

<http://ncode.syosetu.com/n2135>

m / http://ncode.syosetu.com/n0359n / の続きですけど、キャラ以外はあんまり繋がってる点がありません。実質フラグも大したこと無いです。

不定期更新注意して下さい。ひょっとすると急に凍結もします。

第一話「重ね重ね自己紹介」（前書き）

はいっ！

新作できました！（ワ）／

哲彼とかで文体が大きく変わったので、また、気分を改めて新作ですっ！

第一話「重ね重ね自己紹介」

まだ頭がはつきり働かないな……。
なんて目をこすりながら考えている。

ふと起きようとしたら、何かベッドの中に堅いような柔らかい感
触。

こう言葉にすると矛盾するけど、確かに毛布より堅いが、石より
は柔らかい。

……

……

……

おっと、思考が止まってしまった。とかなんとか言ってるが、自
分でもうすうす気付いている。

「早く出てこい、凜」

シーン

あれ？ 違った？ え、まさか何か入ってきたとか……

俺は急いで毛布をめくる

そこにはお人形……

ではなく幼女のお人形に似た凜、春風凜はるかぜりんであつた

丸っこい顔つきと瞳、それに綺麗な金髪と、完璧な幼女である。

……容姿だけは。

性格は……、言いたくない。

だって、言いたくないほど病的な愛なんですもの。しかも俺に向
けられてるし。

容姿だけは良いのにな……、と呟きながら凜を起こす。

「起きろ、何やってんだ」

「ふああ……。おはよう……zzz」

「寝てる寝てる」

「大丈夫……zzz」

「あ、銘那が俺に抱きついてきた（明らかな棒読み）」
「殺す」

とりあえず寝起きは良好のようだ。

つてか、突き出された包丁が若干、頬にかすったのでビビった。
どこに包丁を隠し持っていたか知らないが、包丁を取り上げ、床に置く。

「凜ちゃん、ごめん、冗談。」

「殺殺殺……」

どうやら寝起きで機嫌が悪いようだ。

さて、リビングに降りて朝食でも作るうか。

夜寝る前に見たテレビが怖かったのかな？　それで俺の布団に……。
可愛いな。

「あ、謙太君を寝取るつもりがぁ……」

前言撤回しながら、俺はリビングに向かった。

「おつはよ！　謙太！」

朝っぱらから元気だな……、銘那。

こいつは佐川銘那さがわ めいな

さつき凜を起こすのに使わせてもらった名前だ。

こいつは中学三年生で、それなりに胸はある方。

茶髪のショートに細い眉とそれに釣り合うきりつとした目。凜に
負けず劣らず美少女だ。

成績優秀、才色兼備、文武両道みたいな格好いい四字熟語が似合
う少女だ。黙っていれば。

確かに、可愛い幼女とこんな美少女と一緒に一つ屋根の下で暮ら
せれば幸せだろう。

だが、さつき言ったとおり凜はあんな性格だ。

「いやゝ、最近性欲溜まっちゃってねゝ、凜ちゃん抱いて寝ようとしたら逃げられちゃったよゝ」

ついでにこいつも容姿がもったいないくらい変態だ。

まずこの年で（しかも女子）性欲って言える変態はそうはいないだろうし、バイなんとかで、つまりは両性愛者らしい。

……しかも思春期を百倍に濃縮したみたいにエロい知識や性欲がハンパ無い。

天は二物を与えなかった。（頭脳＋容姿－エロ＝むしろマイナス？）

「なんか色々腹立つから私と寝ろ」

朝っぱらから何言ってんのこの変態女が！

「心臓に悪いからやめてくれ」

「私の貞操……、謙太にあげるっ」

そういつて抱きついてくるのは良いけど……

サクッ

俺の顔の数ミリ隣の壁に包丁が刺さっていた。

「次は外さない」

「すみませんでした」

……今朝も賑やかです。

第一話「重ね重ね自己紹介」（後書き）

……調子乗ってすみません。ころころ変わって読みにくいですね。しかも前作の最後もアレだったしOTL

正直、読者様も大幅に減られたかと思います。

だーけーど！

これを見てくれている貴方はとても心の優しい方ですね！

貴方には僕が画面越しに土下座しております

これからもよろしく願います。

では。

第二話「あ、もう一人加入。ついでに自己紹介。」（前書き）

よし、あとは木下だけ……、って大事な人を忘れてました……。

いや、あいつのキャラは全く固まってません。

しかも、実は出したいのが後、三人もいます。

……加入フラグをどうにかして立てたいのですが、あいつですらそんなに立ってないしw

さて、本編入りますね。

何か近づいてる気がするけど気にしない気にしない。

ちょうど前のガラスが叩かれてるようだけど気にしたくない気にしたくない……！！

「凜、銘那、お客さんだから出て〜」

「やだ〜」

「え〜、謙太出てよ〜」

そんなこんなしてたら、窓の外から声がした。

「みんな、私をのけ者にして……、ひどいよう……」

俺たちはあえて無視する。

ひどいよう……

ひどいよう……

ひどいよ……

「って怖いわ！」

思い切り窓を開けたせいか、黒のツインテの女子が尻もちをついていた。

こいつは松永^{まつなが}来未。

ちよつと前に出てきただけの、簡単に言うとおっとり生徒会長。

風紀委員の銘那、（なぜか知らないが）広報部の俺と共に学校の3TOPと言われている。

ツートップならぬスリーである。これも、大体のことがノリで通るウチの学校の『らしさ』である。

さて、肝心のルックスはと言うと、なかなかのものであって……一番目立つ黒のツインテール、ふつくらとはしているが決して太ってはいない顔、くりくりとせわしなく動く目、小さく可愛い口元と見た目通りのおっとりした生徒会長である。ついでになかなか胸が大きい。E、Fカップだとか。

「何？ 朝からみんなで寝て。まさか、私をのけ者にして乱こ……」
「頼むからその狙ったようなボケはやめてくれ。そしてお前も参加したかったのかよおい」

このように、天然だか狙ってんだか訳の分からない、エロボケを

かますナチュラルエロ野郎である。

幼なじみだが最近会ってないので、それで済めばいいのだが……、凜や銘那を見ているとそれだけに見えないのは一緒に暮らしすぎてるからか？

とにかく、未だ何かありそうな奴……

「あ、あのさ……、二人とも一緒に暮らしてるって本当？」

「ああ、最近暮らし始めたばかりだけだな」

「じ、じゃあさ、私もその輪の中に入れてよ！」

つまりは一緒に暮らしたいってことか？

「お、お前……、親の許可云々とか、お前は（家庭は）普通なんだからさ」

「それを言うなら謙太もでしょ？ それに、私、家出てきたからさ！」

「いいじゃん、来る物拒まず去る者追わずってかんじでさ。謙太もいいでしょ？ 私は一応、顔なじみだから良いけど」

「え？ けんたくん去っちゃうの？」

一人だけ話が食い違ってるが、それは後で説明するとして。

「そうか……。まあいいか」

「あ、ありがと……」

「そう来なくっちゃ」

……普通なら、『仲間が一人増えました』で、終わるのだが、俺の家はそうはいかない。

俺の家ならこうだ。

変態が一人増えました！

第二話「あ、もう一人加入。ついでに自己紹介。」（後書き）

來未の加入フラグが薄いつ！

と、言われても仕方ありませんね……。

ってか学校パートが始まらないのも問題ですがw

実際、家の中でほのぼのパートしてる方が好きなんですよね……。

あ、更新頻度については何も言わないで下さい。

実は一日一回とかたくらみましたので。

第三話「変態は変態でも人それぞれの変態だ。だが変態だ。」（前書き）

よし！ 一日おき投稿完了！

そして実は、早急に出さないと物語が成り立たないキャラが二人も

！！

……でも、物語は緩やかにしたいですね……。

自己矛盾ですね……。

あ、本文をどうぞ。

第三話「変態は変態でも人それぞれの変態だ。だが変態だ。」

問題、成長期の中学生3人と、小学生1人で生活費はどれだけかかるでしょう？（光熱費、水道代、等々込みで）

家計簿を付けていて、気が付けば口から回答が出ていた。

「死んだ……」

「ゲームでもしてるの？」

「謙太が死ねばいいのに……」

「いやいや！ 凜ちゃんも銘那ちゃんもひどいって！」

…… 來未、貴様が一番の原因だ。

元々、幼女と中学生×2を養うのでさえ悲惨なのだ。

伸び盛りだから凜も結構食べるし。

それに「牛乳女……」が……
うしちちおんな

いきなり凜が口を挟んできた。

「つて凜！？ 今頃気付いたの!？」

「逆に謙太は結構見てるのね……」

その言葉と同時に女性陣が俺から約5m位距離を取り始めた。

「そんな……、俺が変態に見えるか!？」

「……うん」

「そんな変態な貴様等に言われる俺って……、悪かったですねすみません、だから距離を取らないで!!」

ジト目で見ながら一歩ぐらい後退された。

（性格は無視して）美少女＋ジト目＋7mぐらい＝普通の人なら
確実に心折れます。

「生きててごめんね……。」

「あ、ごめんけんたくん!!」

それでも駆け寄ってくれる人は一人ですか……。そうですね、ホントに鬱になってしまいです。

「僕が全て悪いんですね……。気付いています……。」

「謙太！？　口調変わってるしマジで大丈夫か！？」

「あ、謙太久しぶりに僕って言ったね」

なぜか俺のツツコミの気力をそぐように、空気を読まない來未。今度は三人もツツコむのか……。

結局、物事が俺の思惑とは逆方向に動き、家から近くのバス停でバスに乗って数分で、少し大きめのショッピングセンターに着く。

……何回も通ってるはずの正面ゲート。それなのに気分が重い。

一つはお金のことだ。親の保険金は『俺一人が生活できる程度』である。はい、親には泊めていること自体秘密です。

肝心の親は、現在病院で治療中だ。凜の所為で。

もう一つは、ここで色々あったからだ。

ちよつと前には親友の公開自殺を見せられたし（現在も思い出したくないほどのトラウマ）、最近は凜がまた公開自殺をしそうだったし（防いだ。）、銃で撃たれた（生死の間をさまよったらしい）。

普通の人なら経験できない経験をした……、と言えば綺麗に終わるのだが、笑えないようなことばかりなので本気で来たくない場所である。今回ばかりは冗談抜きだ。

「さあーて、何買うの？　あ、ってみんな何で来てるの？　私は雑誌立ち読み」

……ってか基本的には俺一人だったんだけどな。

「凜は？」

「いつものことだよ？」

「へ？　いつも俺一人に行かせてるじゃんか？」

「うしろからこっそりみてるだけ。今日はみんないるから出てきてるけどさ」

「……いつも後ろから見ってたんだ」

……正直聞きたくない事実だ。

「あ、私は初めてだし！ 何買ってるか見たいし！」

「どんな理由だ」

「私の答えもツツコまれるの！？ ……あ、でもちよつと興奮するかも……」

とても生徒会長とは思えない言葉である……。 (まあ、銘那も風紀委員なのだが)

今日は幻聴の多い日だと願いたい。

第三話「変態は変態でも人それぞれの変態だ。だが変態だ。」（後書き）

変態は変態でも人それぞれ。でも変態！

いや、來未のキャラが固まって良かったです！

Mと言う発想は結構思いつきですw

あ、でもエロい風紀委員長、Mの生徒会長って何か良くないですか！？

それにしばらくしたら年上のお姉さん来ますので……。

ますますエロな影響を受けているこの小説でした……。

第四話「フラグ立ててみよう」(前書き)

実験的に銘那フラグを立ててみました。

ってか銘那も来末もフラグ立ってないしw

正直凜も立ってるかどうか怪しいところだしねw

と、今度からは真面目にフラグ建設&処理しますから許して下さい！

第四話「フラグ立ててみよう」

結局、銘那は中にある本屋、凜と來未は付いてくることになった。
「……さて、まずは野菜からだな」

自慢ではないが、実はもう家事が完全に出来るようになっていて、料理も俺が担当だ。

「今日は……、アジの干物があつたからそれを焼いて、ついでに適当にあり合わせを煮て、盛りつければいいか……。」

「また魚か、飽きた」

凜は口を尖らせて怒ったように言う。ってか俺は結構考えてるつもりなんだけどな……。

ま、この程度ならいくらでも変更がきくので、大体はいつもこんな簡単なメニューになる訳だが。

「んじゃあ……、鍋でもする？ 材料は結構家にあるから。」

とかいいながら側にあつたネギを買い物がこに入れる。

ネギは肉を軟らかくするし、栄養もある。けっこう優れたものなのだ。決してロイツマのアレを歌うときに振ってはネギに失礼だと思う。

……とかいいながらも当然の如く取っていく來未と凜。

「ていやあああー」

「おりやあああー」

俺の目の前では、なぜか中学校の生徒会長が小学生と、ネギでチャンバラしています。

……どうでもいいけど、せめてレジ通してからにしてくれ……。

さて、気を取り直して現在、アイスコーナー。

最後に、ちよつとだけ贅沢しようと思って、ハーゲンダッツを買

うつもりだ。

……「ハーゲンダッツで贅沢なんて貧乏」なんて笑いながら言わないで欲しい。一応前にも言ったとおり家計はヤバいのだ。

他はもう買う物がないので、ゆっくり選べるな。

俺は（年に似合わず）遊んでいる二人に声を掛ける。

「みんな何にする？」

「うーんとね……」

凜はその辺探し始めた。ちょこちょこアイスの棚を覗き込んでいる。

と、視界の横から來未の手。

「あ、私はこれね！」

そいつって出てきたのはチョコバナナみたいな形のアイス。

……あれ？　こんなのあったんだ……。

……嫌な予感しかないのは俺が思春期だからなのだろうか、それともこいつ等の行動だからなのだろうか。

「やだなあ、謙太は。私はそれを舐めるために買ったんだよ」

君のその腐ったセンスをたたき直して良いですか？

ひよい、と横から凜が何か容器がカップ状の物を投げ込んできた。

……よく見ると安酒であった。

「安酒は身体にわる……、って子供が酒飲むな……！」

「おいしいじゃんか」

「飲んだのかよ！　……はあ、はあ」

本気で二回もツツコミをすると息が切れてくるな。

「んじゃ、わたしはタコあじのアイスね」

「存在するのか！？」

「ほい」

「マジであつた！」

たこ味のアイスを発売したアイス会社は一体何を考えてるんだ。そんな力オスなことを考えかけた。

「結局來未は何にするんだ？」

來未の話題をして、さっきの疑問を振り払う。

「はあう……、え？ いや、てつきり晒し&放置プレイかと思ったんだけど」

「頼むから外でそんなこと言わないでくれ。警察に突き出すぞコラ」
「余計感じちゃうよう……。」

とか言いながらも（なぜか）なす味のアイスをかごにいれる。
たこ味とか、なす味とか、今アイスはゲテモノが流行っているのかな？

なんてカオスな思考に入りかけたら來未が口を挟んでくれる。

「あ、銘那ちゃん忘れてない？」

「確かに忘れてたな……、よし、呼んでくるから先にレジ行つてくれ。最悪ドライアイスもらって入れればいいから」

「わかった」

そう言うなり走り出した。

人はまあまあいるので、それをすり抜けながら走る。

しばらく走って本屋に着く。銘那は割と入口に近い位置にいてくれた。

「銘那、アイスいるか？」

「欲しい欲しい！ 一緒に見に行こー！」

なぜかハイテンションで彼女は言った。

結局、よくあるカップアイスにした訳だが、列が長いので暇である。

ちよつと銘那に話しかけてみた。

「あのさ、銘那がその……、両性愛者なのは何か原因がある訳？」

「ま……、そういうことになるね」

そう言って表情を曇らせる。

……言いたくないようなひどいことがあったのかな？ 親父さんも無職だったし、それなりにいろいろあったのだろうか？

だが、人には詮索されたくない出来事があるはずだ。やめておこう。

「あ、そだ」

思い出したように銘那が言った。彼女なりの話題そらしなのだろうか。

「ん？」

「あのさ、この前近くの遊園地にロードローラーコースターってのが出来たらしいじゃん？ それ行ってみたいなーと思ってさ」

「お、いいぜ。今度の日曜日ぐらいにみんなで行くか？」

「あ、いや、その日は、來未は学校の用事、凜ちゃんは預けられてんの。それに……、謙太だけと行きたいしさ。」

銘那は上目遣いでこつちを見てきた。

彼女は……、けっきょく俺をデートに誘ってる訳か？ よく分からない。深読みしているだけかも知れない。

一応、OKしておくことにしよう。

「オッケー、じゃあそうしようか」

……また、その日にトラウマが増えるとは知らずに。

第四話「フラグ立ててみよう」(後書き)

……はい、建設完了ですっ！

時間がないので一言。

また遊んでしまいますた。

第五話「フラグに鈍感な絶対必要」（前書き）

……謙太は鈍感キャラにしたくなかったのですが、とうとうやっ
てしまいました。

あ、前回の遊びは、『実はボカロキャラの象徴的アイテムを六つ入
れた』ってだけです。サボってません、絶対に。
さて、本編をどうぞ。

第五話「フラグに鈍感は絶対必要」

目が覚めた。昨日はゲームとか色々しすぎてそんなに寝てなかった。結構寝覚めが悪い。

ちよつと早いがりビングに降りてみた。凜も居ないし、來未は学校の仕事。今日は銘那しかないはずだった。

だが、そこには銘那は居なかった。代わりに、銘那に似たとても綺麗な美少女がいた。

彼女は、こちらを見て笑いかけた。

「あ、あの……、どちらさまでですか？」

「え？ 寝ぼけてる？ 銘那なんだけど」

……信じられない。何かの間違いだ。

「……いつもエロなことを妄想している、『銘那』ちゃんですか？」

「そこまでいくと失礼を通り越して殺意しか覚えられないね」

そう言つて銘那は鞭らしき物を構えた。

なぜかビリビリと音が鳴っている……。これは死を覚悟した方が
良いかもしれない……。

「……ごめんなさい。殺さないで殺さないで殺さないで
殺さないで殺さないで殺さないで殺さないで殺さないで」
謙太って、筋金入りのヘタレなんだねー。ごめん、今すぐしまっ
かへん。」

そう良いながら、手元にあるバッグにしまう。

そういえば銘那はもう準備してあるらしい。なんか……、こう……、よく分からないがカジュアルとか言うのではないのだろうか？

そんな服装である。

寝起きなのでよく分からないが、置いてあった朝食を食べて、顔を洗い歯を磨く。前日準備しておいた服に着替えて、準備完了だ。

そろそろ開園時間なので出発しようかと思う。

「もうそろそろ行く？ 俺は準備終わったし、だんだん混んでくるだろうしさ」

テレビの電源を消す音が聞こえて、ドアの向こうからボーイッシュな美少女が現れた。朝とは違いちょっと男らしく、荒々しい仕草でドアを閉める。ちよつと見間違えれば美男子にも見えなくもない。

「あれ？ もう女らしくしないの？」

「……馬鹿」

なぜか銘那は怒っているようだった。あれ？ 銘那に対して偏見を抱いていたから怒られたのかな？

……結局、よく分からない上に、銘那はまだ怒ったままバス停に到着してしまった。

第五話「フラグに鈍感な絶対必要」（後書き）

はい、謙太殺したくなってきましたよね！

ちなみに、今回は新キャラ登場予定＆誰かの過去編？（御察しの通りです）が入る予定です。

……あ、クリスマス特別編もやりたいし、哲彼最後の投稿やりたいですね……。

とにかく時間が欲しい！

あ、他にはアイデアとタイピング能力が欲しいです。

はい、小説の全てです。

……でもさ、銘那デート編の間にクリスマス入る予定なので、凜と、來未が別々に事件起こします！ はい、それぞれラストで繋がる仕様にしたいと思います！

（12/28追記 出来ませんでした>< すみませんOTL）

ってかさ、それが上手に出来る技量も欲しいですね……。

頑張りますOTL

第六話「遊園地とショッピングセンターを使いすぎている件」(前書き)

……クリスマス特別編を思案中です。

ってか、相棒との合作もあるんで、イブは超忙しいです。
時間がないのでこれだけで。

第六話「遊園地とショッピングセンターを使いすぎている件」

行き先を確認して、険悪な雰囲気の中バスに乗る。

相変わらず運転手はやる気のない声。バスの中は重く、暗く静まりかえっていた。

皆、携帯を弄っているか本を読んでいるかで、バス内で時間を潰している。

まあでも、乗車している人自体が少ない。

……気まずい。

とにかく気まずい。

何か話そう。そうじゃないと俺が耐えられない。

「……あのさ」

「ん？ 何？」

……怒りが言葉に表れていないところがまた怖い。

まあ、希望的観測をすれば怒りが収まったと言えようが、とにかく、銘那も暇そうだったので乗ってくれた。

「銘那が乗りたいって言ってたやつ、ロードローラーコースターだったっけ？ それってどんなものなんだ？」

「んとね、ジェットコースターのレールがただの道っただけ。だから、結構進路が自由らしいよ」

それは安全なのか！？ ってかどんな思考回路してんだ遊園地！俺は動揺を隠せなかった。

「……それを一緒に乗るのか？」

「そう。結構面白そうだし、ね？ 一人だと雰囲気合わないし、周りのリア充から『一人で遊園地来てんの？』みたいな軽蔑した目で見られたくないじゃん？」

その半分が被害妄想だと言うことに銘那は気が付いていない。

リア充は周りのことなんか気にする訳無いだろう！ 周りの目を気にせずに楽しく遊んでるだけだ！

だからなのか、俺もリア充という人種に若干殺意を覚えている。そういえば、俺、友達少ないよな……。

「銘那、俺以外に友達いないの？」

「いや、いるけどさ……、恥ずかしいじゃん？ 謙太達以外にはあんな面とか見せてない訳だし」

銘那は一応、充実しているようだ。……羨ましい。

どんどん銘那の機嫌が直っていくのが分かる。どんどん笑うようになった。

「お、着いたみたいだぞ」

その言葉が合図になって、俺たちは席を立つ。相変わらずな運転手の声を聞きながら、料金入れに小銭を数枚入れる。

休みなのだが、やはり十二月なだけあってみんな忙しいのだろう。人が少ない。

カウンターで入場料を払い、中に入る。

中は外とほとんど変わらず、少し混んでいる程度だった。

「銘那、どこにあるんだ？」

「えーと……、あつたあつた。あっち」

嬉しそうに、人が集まっている方向に指を差す銘那。

人が集まっているは集まっているのだが、そこからする悲鳴の量がハンパじゃない。

「あれは、お化け屋敷ですか？」

「中一の英文じゃないんだから、見たら分かることを聞かないの」確かにロードローラーが一回転している。そして急カーブを曲がったり、超高速で落下したり。それに、レールがないので結構ブレがあり、かなり怖そうだ。

と、言うかロードローラーが回っている光景は、実にシユールだ。気付くと銘那が上機嫌で歩き出していた。俺は急いで後を追いかける。

列の最後尾で立ち止まる。俺は思考を再開した。

これは安全なのだろうか？ いや、法律とかそのあたりで危険な物は禁止されているはずだ。

でもどれだけ信用できるだろうか……。いや、その疑念を振り払え！ じゃないと乗れない！

あれ？ 何で俺、こんなに乗ろうとしてるんだ？

銘那のお願いだからか？ それとも暇だったからか？

……そんな理由でこんな怖い物に乗るのか？

思考はまた中断された。

「ほら、先に乗って！」

そう言った銘那に座席の奥へと追いやられた。深々と思考する前に、機体が動き出した……。

「楽しみだね」

「俺はもう頭の中が真っ白になってきたぞ……」

「それはイクときだけでしょ」

「お前のボケにもつつこむ気力がない……」

本気でつつこむ気力がない。と、というか俺のヘタレを理解してほしいと思う。

って、登ってるし地面らしき物を登ってるし……

柵とかガードレールとかあるけど機体がぶつかれば、文字通りペしゃんこになるだろうな……。

って怖い怖い怖い

「お、きたきた」

銘那は挑戦的にもそう言った。

……俺はもう意識が飛びそうなのだが。

怖い怖い怖いって落ちる！？ 落ちてる落ちてる！ 係員何とかしろ！！ 死ぬ死ぬ死んじゃうって！ 死にたくない死にたくない

助けて誰か！！

隣からも声が聞こえる。

「あ、ちよつと怖いかも……、ねえ謙太、手、握っていい？」

逆に俺も握りたい。それほど怖い。

そして、手を繋いだ瞬間、狙っていたかのように一番の目玉、急降下からの……

その辺りから俺は意識を失った。

「いやー、ビックリしたよ、降りたら謙太が屍になってるんだもん」

「吐かなかっただけマシだ」

「私たち、手、繋いだね。恋人同士みたいじゃん」

銘那は笑いながら言った。

意識がまだ回復していないのか、とても普段より可愛く見えた。

「意識も戻ったし、帰るか？」

「せっかく来たんだしさ、もうちょっと遊ぼうよ！ まだ時間もあ
るし」

結局、まだ遊ぶことになった。

……断つとけばよかったかもな。あんな事になったんだから。

まあでも……。

また俺はトラウマが出来たとだけ言っておく。

第六話「遊園地とショッピングセンターを使いすぎている件」(後書き)

ロードローラーコースターって何それw

ノリで出したけどアレですw 扱いめんどくさいw

ってか、この後の時間軸がまたカオスになります。

あゝ、大部分は考えてあるけど、まとめ方だけ今から考えなきゃ……。

合作も俺の部分があるしな……。

頑張ります！

第七話「単にギャグを入れ忘れただけの話。」（前書き）

この話は決してシリアスパートみたいに山場がありません。僕なりの仕様です。w

いや、つくったつもりですけどね？ 一度読んだら分かりますよ。無いです。

えと、今回はマジでシリアスパートを作って、考えて、学校でも考えて……

言い訳しない本気です。これが。

では、真面目（？）な本編をどうぞ。

第七話「単にギャグを入れ忘れただけの話。」

その後は色々遊んだ。

お化け屋敷にメリーゴーランド、射的みたいな物など色々。
そして現在は閉園時間二十分前。遊び尽くした状態だ。

「さて……、帰ろうぜ」

俺は気力体力共に使い果たし、生ける屍のような状態だ。

「オッケー、私もお腹すいてきたしね」

あ、帰ったら夕飯の準備がまだだった……。

飯はタイマーがあるし、昨日作ろうと思ってた魚を今日出せば、
買い出しに行かなくて済むか。

「あ、ちょ、謙太、動かないで」

銘那が急に真剣な声色で囁いてきた。

珍しい。あのお気楽な銘那がこんな声を出すとは……。

感心していると、隣で銘那がまた囁いてきた。

「ゆっくり歩いて。隣のガラの悪そうな集団に見つからないように
ね」

自分の世界から戻ってくると、隣にはガラの悪そうな男達が数人、
なぜか遊園地にいる。

その中の一人がこちらに気付いたようだ。睨まれた。

銘那はか細い声で悲鳴を上げたが気付かれていないようだ。

男はそのまま立ち去ろうと……したときだった。

「お？ あの時のお嬢ちゃんじゃないか……。大きくなってねえ……」

親戚のおじさんみたいな事を言われると、銘那は目を瞑り耳を塞ぎ、そしてその場にうづくまった。

銘那の奇妙な行動を深く考えようとすると、一番ガラの悪そうな、まさにボスって雰囲気の方が銘那の顔を覗き込むようにしていった。

「そんなに怖がるかね？ 別に君を取って食おうとしてるわけじゃないし、まさか僕たちを鬼か何かだとかは思っていないよね？ お嬢ちゃん」

銘那は腰を抜かして尻もちをつき、ずりずりと後ずさった。

それは学校での凜々しさを欠片も感じられない。全くの別人のようだった。

「あ、あの……、一応俺の連れなんで怖がらせないで下さいよ？」

「いやだなあ、彼女が僕の顔を見て勝手に怖がってるだけじゃないか」

それに反して、男は朗らかに笑う。腹立たしいほどに。

「あ、すみません。でも、連れが怖がってるんでさっさと行かせて

「下さい」

そういつて、無理矢理銘那の手を引つ張つて連れて行く。

「やだねえ、若い子はせつかちで」

そんな声が聞こえたような気がしたが、今はそんな場合じゃない。

頭を冷やしてよく考えると、俺は逃げていた。

また俺は助けられなかった。

第七話「単にギャグを入れ忘れただけの話。」（後書き）

……すみません。確実に脱力系でもなく、シリアスでもなく、ギャグでもないですねOTL

次回は回想にはいるためのフラグ&シリアスに再挑戦です!!

小説を書くのは楽しいです。ですが、狙って書くのは難しいですね……。

第八話「バトルシーンの難しさと楽しさは意外だった」(前書き)

バトル書いてる人すみませんm(――)m

サブタイトルから話の内容まで全てすみません。

画面越しで見えないかも知れませんが土下座中です。

……これが僕の本気だ!!(風呂で考えてただけ)

第八話「バトルシーンの難しさと楽しさは意外だった」

結局逃げてしまった俺たちは、さっさと帰ることにした。

行きと同様、出口まで行く俺たちの足取りも、空気も重かった。

銘那はビクついてるし、俺は落ち込んでいる。

二人ともこの空気をどうにかする気はどうやっても起きなかった。思い思い足取りでやつと出口にさしかかった時、またガラの悪い集団がいた。しかも、小学生ぐらいの女の子と笑顔で話している。

……その顔は、笑顔というか作り笑いのようだったが。

その時、銘那がふと叫んだ

「や、やめてあげて！　お願いだから、もう、そんなことは止めて……！」

足はガクガク、へっぴり腰で声にも張りがなかった。なぜか、いつもの銘那ではなかった。

その必死の叫びは、男達の耳に届いた。

男はこちらに気付き、怒り、睨みながらこちらへ近づいてきた……。

怖い。殺されるかもしれない

「またあの時みたいに調教してあげようか？　お嬢ちゃん」

怒りを隠しきれていない猫なで声が怖い。

もう怖いしか考えられなくなってきた。

「私はいから、その娘を家に帰してやって……。お願い」

銘那は必死に懇願する。震える手を目の前で合わせながら。「知るか」

その声と同時に、男は刃物を取り出した。包丁のようだ。

そして、それを銘那の顔面に突きつける。

「あ、あの娘は無事に返してくれるのよね？」

怖くて怖くて、今にも泣きそうな目で言う。

それはどこか見覚えのある、助けを求めている目だった。

助けられるか？ 怖くてとても出来そうにない。

心の中で自問自答する。

そうしている間にも男は手を動かしそうだ。

最後に思い出したのは、ここで起きた出来事。それと、銘那とちよつぱり過ごした記憶。

俺は銘那を守る。

最後に思ったのはそれだけ。

そして、何も考えずになけなしの勇気を振り絞って、男に体当たりする。

「うあつ」

小さな悲鳴と共に、銘那の拘束が解かれた。

間髪入れずにのけぞった背中に肘を入れる、そこには全く迷いがない。だって思考がないから。こけて、うつぶせになっている相手にの首の裏側に、適当に落ちていた木で一撃入れて気絶させる。

時間にして数十秒。気絶した男の完成。包丁は地面に置く。

「この野郎……、殺す！」

その言葉を皮切りに、仲間らしき大人数名が俺を取り囲む。それぞれの手にはスタンガン、バタフライナイフなど思い思いの武器を持って、構えている。

「え……、ちよつとそれは怖い」

言い終わらないうちにまず、置いておいた包丁の刃で二人ぐらいの男の手を払う。ちよつとだけ強くなった気分だ。でも調子に乗ると足下をすくわれるので思考を止める。後ろから来るスタンガンと携帯警棒を左手で弾き、包丁を構えて一回転する。全体が一気にひるんだところで、囲いの一角の脇腹に入れて、よろけた隙に脱出。

「待てや！ 逃げんなあ！！」

置いてあつたバケツを持ち、声のする方へ中身をブチまける。するとあら不思議、自分が持っていたスタンガンで感電しちゃいました。痛みで動けない隙に、また首の裏側を包丁の柄で思い切り殴る。はい、気絶した男（複数）の完成です。

思考を再開して、銘那の顔を覗き込む。

「大丈夫？ 怪我はない？」

テンプレな台詞から帰ってきたのは、とても女の子らしい、可愛い声だった。

「怖かったよう……」

そういつて抱きついてきた。……このシチュエーション、男子にはとても天国なんです。が。（性格を除く）

「まあまあ。さて、帰ろっか」

そう言つて銘那を出口まで連れて行く。気付いた時には、あの女の子はいなかった。ので心配はないだろう。

頼りない足取りで出口に向かう銘那と、何もなかったかのように振る舞う俺。

正反対でちよつと不思議な光景。でも、俺的にはこんなのも悪くないかな。

急に、バスを待っていると銘那が口を開いた。

「……あの、昔のこと、ちよつと謙太に相談したいんだけど」

そこから銘那の昔話が始まった。

第八話「バトルシーンの難しさと楽しさは意外だった」（後書き）

クリスマス原稿仕上りたいけど、これも投稿したかったのだ。

ちなみに、一部緊張感がないのは仕様です。ですが、一部です！

（ちよつとはシリアスな部分入れましたよ！？）

あと、喧嘩シーンでの、謙太の包丁の扱いは凄いですw 妙に上手いのは、凜や麗を見ているからであって、暗殺者とかではありません。あしからず。

スタンガンにも隙が出来るほどの電力はないと思いますしねw 多分「痛ッ」程度です。

それに首の裏でも男を気絶させるほどの腕力とは……、謙太、ヘタレキャラ卒業ですか！？

ってかね、謙太はひ弱&ヘタレキャラにしたかったんですけどね…

…。

作者はヘタレです（キリッ

長々とすみませんでした。

第九話「過去編やると長くなる」(前書き)

お待たせ(したかな?)させてしまつてすみません!!

……クリスマスは回線が逝つて企画のみしか投稿できませんでした。すみません。

本当はそこでフラグ消化するつもりだったんですけどね

あ、今回は全て銘那の語りです。

では、どうぞ!

第九話「過去編やると長くなる」

私さ、お父さんが借金背負ってるって話したじゃん？ まあさ、理由は色々。投資とか、博打とか色々あるけど、それでお母さんが逃げちゃったんだよね。

私、完全に見捨てられたと思ったよ。今もだけどね。

そんなことがあって、私、１１歳の時から働き始めたの。ポルノ系業界でね。謙太知ってる？ 意外とやりたいって言って、直接会えばすぐ仕事見つかるし、二回目からはあっち側から持ちかけてきてくれるんだよ。

詳しく説明すると長くなっちゃうから、かいつまんで説明すると基本的に本番と前戯のみと撮影があるのね。謙太隠語分かるよね？ まあさ、私は自分でゆーのもなんだけど、強かに生^{した}きのびていた方だしさ。

でも私にも汚点があって、一度あの男達に騙されたんだよね……。最初は普通に撮影って呼び出されたの。

まあ、そこから欲情して襲ってくる奴もいたから、その程度なら逃げれたけどね。

ふつうにホテルに入って、準備して、ポーズ取って、はい撮影終了と。とか調子に乗ってたらさあ……。

お金もらって、丁度その日完済できる日でもものすごく調子に乗ってた訳……。

そしたらさ……。

え？ そんなに辛いなら話さなくていい？ そんなに辛そうだった私？

うつん。あいつらも悪いし、私も悪いことしてた。

だから、これは懺悔みたいなものだよ。していいかなじゃない。させてほしい。

続けていい？

急に車に押し込められた。

頑張っただけで、小学生の力では時間稼ぎも叫ぶ暇もなかった。

そのあとは目隠しされて、色々縛られて……、

いつもはそんなこと注意してたのに、その日は本当に調子に乗って、それが分かって悔しくなって、悔しくて、怖くて、後悔して、いろんな心が混じって、結局わんわん泣いた。

わんわん泣いて、泣いて。

そこからはほとんど覚えてないから、少し変なことがあっても文句言わないでね。

目隠しされて見えなかったりしたのもあるし。

もちろん、黙らせようと睡眠薬が殴るかしようとしたんだろうね。急に辺りが静かになった。

直後に罵声が飛んできて、私は殴られる　　と思って身体をすくめたら……。

事故った。乗ってる車が。

私の席は勿論ワンボックスの後ろで、図体のいい男達が確か前に乗っていた気がするから、無傷で済んだ。

あの時以上にあいつ等に感謝した時はないね。って、話が逸れたか。

それでドアが開いて、中に誰か入ってきたようか足音がしたの。

中でパニックになってる連中は「やっちまえ！」とか言っただけ、一斉攻撃したらしいけど、聞こえてきたのは男達の悲鳴。

つまり雑魚は蹴散らされたって事ね。

それで、無傷のリーダーらしき人達も逃げ出して、私と助けにくれた人と、二人っきりになった訳。

白馬に乗った王子様……、じゃないって。もしそうだったら最悪の出会いじゃない!?

売春一步手前の小四を攫われそうになっていたところを助け出して、色々恥ずかしいよ!

ってかね……、一番肝心なところが違うからね。

え? それで私を縛っていた縄がほどかれていって、最後に目隠しが取られて、

お礼を言った相手はなんと、

私と同じ年の、しかも女の子。

こんなこと、信じられる?

私だったら無理だよ。

え? バスが来た? じゃあ、その中で話そっか。

小銭あったかな……? え? 払ってくれるの? ありがとねー

第九話「過去編やると長くなる」(後書き)

いや、最近は暗中模索の繰り返しですね。

バトルが難しく面白かったり、

語りは楽だけど雑になるし会話の挿入が難しいし。

でも、癖が分かっていいですね。スタイルの暗中模索ってのは。

さて、実は過去編繋げたり、百合フラグとか立てたいのですが……。実際、どこまで実行できるか、技量がほとんど無いので分かりませんOTL

ほかにも短編一つ制作中ですし、

なんと……。コラボのようなもの(キャラを借りる)にもてをだしちゃいました><

……。ですが、今のところ秘密です。なんとなく。

(本当は、実行できなかった時に逃げれるようにですw)

ってゆーか、×切(25は回線が逝ったので特別見逃し)ギリギリですね。相変わらず。

受験生なのにこんなに小説書いてて良いのかって友達でした。

第十話「煮詰まったり鬱になったり展開がかみ合わなかったりしたので一度休

……ちょっと辻褄合わせです。

そしてバトルの後日談、そして銘那過去編にちょっとした休憩。

……遅れてすみません。

第十話「煮詰まったり鬱になったり展開がかみ合わなかったりしたので一度休

「んでさー……、って謙太！？ 大丈夫なの！？」

バスに乗り込もうとするなり銘那が叫ぶ。

うるさいなあ……、と思いつつもたまたま目に入った運転手さんも驚いている。

あれ？ 俺そんな驚かれる身なりだったっけ？

困惑しながらも小銭を取り出そうとポケットに手を突っ込む。

急に視界が揺れた。地震か？ なんだろう、全身の力が抜ける……

「謙太！？ 大丈夫？ 今救急車呼ぶからじっとしてて！！」

あれ？ 手の感覚がない？ ……もしかして俺、重傷！？

色々考えていたが、救急車の音と共に思考が薄れていった……。

「おーい、大丈夫かい？ 相当腰とか腕とかやられちゃってるからね。痛みがないからって動いたら倒れるわな。普通。」

随分ジジ臭い声に目覚めさせられた。

贅沢は言わないが、最近可愛い少女に囲まれているせいで慣れない。若干不快だ。

見渡すところは診療室。その簡易ベッドに寝かされていた。一面白の部屋は清潔感で満たされていて好きだが、湿布や薬品の匂いが混じっている病院の匂いが脳を刺激し、少し吐き気がこみ上げる……だが身体は少しも痛まないし頭痛以外には身体の異常が見えない。

「アンタバカだねえ。なに？ 喧嘩したんだって？ この怪我でよく立ってられたな」

目の前のジジイが呆れたように首を振る。

見たところ定年退職しても良さそうな年齢で、頭は白髪だらけ、顔はしわだらけと、もうジジイとしか言いようがない。

「あの……、一体俺は？」

「三カ所の骨折、左肩の脱臼、打撲や骨のヒビは十数カ所。こりやあ四ヶ月はギブス生活だね」

「痛くないんですけど、まさか神経ブツちぎれたとかないですよね？」

「さあ？ お前さんの神経は多分痛みに耐えきれずに麻痺したんだろう。いつ回復するかはわからん」

……おいおい、アンタ医者でしょ

とはさすがに診てもらった人にそんなことは言えないのでとりあえず寝る。

だがジジイは元氣そうに

「よし、起きたのならギブス付けてやつから帰れ」

「帰れ！？ いやいやいや、患者にそれですか！？ しかも料金は！？」

「凜から聞いたよ。親が入院中なんだろ？ まあもうそろそろ退院時だろうが、お金がなさそうだからタダでいいやあ。そのかわり、今後も凜の面倒見てやってくれや」

「凜って、凜の知り合いなんですか？」

「そうだ」

ジジイはほんの少し顔をしかめながら言う。

……知り合いだったのか

「知ってるんですか。凜のこと」

「お前さんよりもな」

簡潔に、あっさりとした答えが返ってきた。

まるでそれは、禁忌に触れるように。

そしてジジイは無言で包帯を巻いた腕にギブスを巻き続ける。左腕に巻き終えたところでやつとジジイは口を開いた。

「聞かないのか。凜やわしのこと」

「いや、気に障らないように……と思っていたのですが」

「ふ……、凜はこんなヒョロいのを好きになったか」

……まあ若干キレかけたがジジイなので大目に見ておこう。

「まあ、一つだけ言っておくと、わしは凜の主治医じゃった。毎日のように怪我をするもんで、見てられなくてのう……。」

「だから何ですか？」

「怪我した時はいつでもこい。今度はお前さんが凜を守る番じゃからの」

見送ってくれたジジイは、なぜか仙人のように見えた……。

第十話「煮詰まったり鬱になったり展開がかみ合わなかったりしたので一度休

……すみません、今回は若干無理矢理感が強すぎました。
時間がないので言い訳は次回！

第十話「ぶよぶよ+テスト」死（前書き）

お久しぶりです、帰ってきちゃいました。
超不定期再開です。

第十話「ぶよぶよ+テスト」死

家に帰ると凜や銘那が出迎えてくれた。

まるで昼の出来事なんかなかったかのように。

「おそいよー、けんたくんがのんびり帰ってきてるから夕ごはん冷めちゃったじゃん」

そう言ってニツコリ笑う凜は、俺の心なんか知らないだろうか。

鬱々とした俺に対して、凜は笑顔でさっさと中へ入っていく。俺もそれに慌てて凜を追いかける。

リビングには銘那と來未がテーブルに着いている。女子三人で談笑でもしていたらしい。

「お、きたきた、手洗ったか？ 謙太。チャッチャと洗ってみんなで食べるぞ！」

「みんな、謙太と一緒に食べたくて待ってたんだよ。さ、はやくはやく」

そんなながれで手を洗い、俺もテーブルに付く。

今ではこの光景が普通になってきている。まだそんなに過ごした覚えが無いのに。

「それじゃ、いただきますーす！」

「「「いただきますーす！」」」

パクパクと食べる凜、

喋りながら食べる銘那、

ボーっとしたり、笑ったり、遊んだりしながら食べる來未。

皆揃いもそろって行儀が悪いが、それより楽しかった。

そう、みんなで明るく食事をするのは楽しい。だからこそ、あの出来事がまだ心に引っかかる。

「けんた……くん、私が作った肉じゃが美味しい？」

「ああ、なんか隠し味入れた？ なんか普通より一味違って美味し……」

「やったー！ 血入りの肉じゃがおいしいってー銘那！」

銘那はご飯をほおばりながらこっちに言った。

「よかったね、凜ちゃん。ま、私のほうが上だけど」

「……包丁で間違えて手を切ったんだと思っておく」

……やっぱ食事は一步間違えるとピンチだ。

夜。

來未が入ってきてから、女子は全員リビングで布団を敷いている。

……もちろん俺だけ自室だが。

そんなわけで、窓枠に座りながら冷蔵庫にあった缶コーラを一口飲む。

月が綺麗だ、と思う。

そんな綺麗なものを守るためなら、何にでも勝てそうな気がする。でも、違う。

勝てないものには勝てない。シマウマはライオンには勝てないのだ。

ずっとずっとずっと、無力のまま生きていくんだ。

その時、俺の思考を止めるかのようにドアを開く音がした。

コーラを床の上に置いて、ドアを開けたヤツの姿を見た。

それは、包丁を持った凜だった。

俺の顔を見るなり、急に押し倒してきた。

「んな、お前どうしたんだ！？」

「じつとして、じゃないとヘンなとこ切っちゃうかもしれないから。」

そついうと上半身だけ俺のパジャマを脱がし、包丁を構える。

「いまからわたしのなまえをきざむの。もうわたしの手がとどかないでしょへにげられないように」

包丁を構える手を俺は必死で止めて、凜の手から包丁をひたたく。

すると、凜は抱きついてきた。

「めいなから今日のはなしきいたよ。それで、またわたしにだまっ
てどつかへどんどん行っちゃいそうで……」

「……怖かったのか？」

「こわいよ」

端的な答え。だけど、俺にまで伝わってくる震えで言いたいこと
は全て伝わった。

「悪かったな。でも、さ」

「なに？ 自己犠牲をびかするなんてナシだよ。……怖かったんだ
もん」

「いやいや。あのさ、俺、そんなにいなくなったらイヤか？」

「そんなの聞くんなんて、そーとーのバカだね！」

笑顔で罵倒された……、久々に、しかも年下の子に罵倒された……。

……尋常じゃないほど気分が落ち込んだ。

「やつばいいや……もう寝る」

どうでもいいや。全部。

好きな娘の近くにいられるのなら。形はどうであれ守れるのなら。

「けんたくん、いつしよに寝よー！」

……手錠を見せつけるのやめなさい手錠を。

第十話「ぶよぶよ+テスト」死（後書き）

あー相変わらず自分のヘタさが目につくわ

ま、それを乗り越えろとある人はおっしゃったわけで。

Mなのか何なのか、これを書いております。

高校生に上がったので、謙太も……

なんてことはありません。不安定な中学生です。

あと中学生の不安定は高校生になると恋しくなる。

無性にあの不安定が欲しくなってきます。

b y・友達。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058p/>

・・・調子に乗って暴走したから見ないで！の続き。のまた続き。

2011年6月27日01時55分発行